

# 現代社会と体育教育の姿

朴 壩一

文芸・言語研究科

今や現代人の生活の中でスポーツ（以下、体育の概念に含まれているとする）はあらゆる役割を果たしている。ある人には職業として、ある人には娯楽として、またある人には他の何らかの要素として体育が存在している。体育は本来社会の模倣的な側面と非社会的な逸脱性といった両面的な側面を持ちながら、内在的な価値である競争心、規則指向性、そして身体的中心の活動という特徴を保っている。体育にはこのように表裏的な特徴を持ちながら、正しい楽しみ方を妨げる要素をも含んでいる。正しい楽しみ方を妨げるこれら要素を排除し、体育を正しく身につけるための一方法として、体育教育を上げることができる。以下、現代社会における社会体育の役割を考えながら、体育教育が現代社会のなかでどうあるべきかを述べてみることにする。

## 1. 現代社会と社会体育の活性化

現在我々は、慢性的な経済不況、高失

業率という国家的危機意識が高まっている社会環境に置かれているといえる。このような状況の中で今最も考えなければならないことの一つとして、国民個人の健康問題を挙げることができる。国民健康に関する接近法として、色々なアプローチがあるだろうが、ここでは社会体育の活性化を取り上げてみたい。社会体育の活性化が我々に及ぼす影響と言えば、先ず、心理的なストレス解消と職業上の生産性という効果がある。また、社会体育の発達は健全な社会意識を促すことにも繋がると思われる。そして、社会的な病理現象の一つである青少年犯罪、価値観の崩壊、中・高年層の疎外感の深化現象なども、社会体育の参加を通して克服できる社会病理現象といえる。これは、我々が社会体育の活動からスポーツの健全な精神を共有することができ、社会の価値を間接的に取得することができるからである。このような例は筆者の母国で

ある韓国でも見られる。韓国は1997年IMFの救済金融を受けて以来、構造改革と共に失業者が増加し、社会貧困層が12%まで増えるという可視的な変化が起きている。そのため、国民階層間の所得と消費に大きな差が生じてしまっている。このような社会変化に伴って経済的費用のかからない余暇活動、つまり社会体育に参加する人が年々増え続けている現象を見せている。新聞記事にも、社会体育を通してIMF危機を乗り越えている一般庶民の話がよく紹介されるようになっている。

“・・・朝の運動時間を除いては一日中笑う機械がないですね’相手の選手にタックルされ足を痛めながらも早朝サッカー会の会員である虎(39才、クリーニング屋)さんはずっと笑顔である。この部活1年目で10年間病んでいた胃病が無くなった位さんと虎さんは‘こういう時代こそもっと運動をしないといけませんね’と言う。虎さんの言っている通りIMF救済金融時代には健康まで赤信号になりがちである。この調子ではいい時代が戻ってきても何の意味も持たなくなってしまうだろう。・・・”(ハンギョレ新聞、1998年8月5日)

## 2. 現代社会と社会体育の役割

上で挙げた韓国の例は、日本の経済危機意識とはやや異なるところもあるだろ

うが、心理的ダメージは大いに類似していると言えるであろう。このような観点からみても社会体育が果たす役割は確かに大きいと思われる。健全であり、なおかつ、多数が参加できる文化活動として有望な分野が社会体育であると言えようである。社会体育に参加することは自律的であり、また、その集まりの中で同質感を抱くことができるため国民階層間の区分が薄れたり、もしくは無くなる。また、社会体育は家族間の新たな遊び文化の形を提示し、低費用でありながら、しかも健康面でも効果的である。国内の景気変化が社会体育に否定的な影響を及ぼすことも事実だが、だからといって社会体育の沈滞を放っておいてはならない理由がここにある。長期的には社会体育が国家経済の状態に肯定的な影響を及ぼすことは間違いないからである。社会体育への参加を通して、職務ストレスの減少と肯定的な価値観の涵養という効果が考えられる。このように社会体育への参加は経済危機に直面している現代人の健康問題にたいへん効果的であると言える。

## 3. 体育教育のあるべき姿

以上、社会体育への参加が現代社会に及ぼす効果を考えてみた。このような効果は、社会体育だけではなく体育自体のもつ効果でもある。しかし、国民全体の

割合からして、持続的に（社会）体育に参加している人々の数はあまりにも少ないのではないだろうか。特に、学校から離れ—社会人として生きていくようになると、体育離れする人の数は急増し、しかもそのような人たちは体を動かすこと自体が少なくなってしまう傾向が伺える。最近では、ゲームソフトなどの普及によって学校離れていない子供たちにも運動不足の傾向が見られると言われている。学校離れている社会人層はともあれ、子供たちに何故このようなことが起きるのだろうか。その原因を社会環境に委ねることもできるだろうが、そうすると社会環境を変えなければこのような問題を解決することはできなくなってしまう。進行形である社会環境を変えることはとうていできることでもないし、ある意味では進歩しつつある社会の一面を否定することにも繋がる恐れがある。従って、他の解決法を考えなければならない。今までの体育教育の姿を社会環境の変化に合わせて変えることは、その一方法である。学校での体育教育は現代人にとって体を動かす数少ない限られた時間でもある。この時間を通して何を教えればいいのだろうか。体育教育の時間を通して教えるべきことは身体的、精神的な健康だけではない。この時間を通して

他に教えるべき大事なことは、自律的に体育への参加を高揚させる動機付けである。そして、このような動機付けが実現するように体育の出来る機会を量的に増やすことも大切である。つまり、学校の体育教育の時間に取得した知識や技術が、高揚された動機付与によって社会人の体育離れしない生活に結びつくように導いていかなければならない。そのためにも、体育を楽しむ機会を積極的に増やすことは大事な条件であるということである。最後に、このような見本と思われる筆者個人の経験を述べておきたい。筆者は現在大学院生の身分で、家、図書館、研究室、バイト先といった限られた範囲で大きな変化のない生活をしている。社会体育への参加や愛好会、もしくは同好会のような団体への参加は、半社会人・半学生的な位置（院生の位置）にいる私にとってはどうも居心地がよくない。そういった意味で、現在学校側で積極的に開設している院生のための体育授業は一週間のめいった気分を気持ちよく晴らすことのできる大変有益な時間である。日夜研究に励む院生の体育への参加を補う一つの活路を難なくこなしていると言えるのではないだろうか。

（ばく・よんいる 言語学専攻）